

先だってバロック期を迎えたイタリアで流行した男性失恋歌マドリガーレ「Dissi a l'amata mia, lucida stella (私の愛する輝く星に告げた)」という歌の解説を聞いた。イタリアでは振られた男の伝統的祭りがあるほど男性が外へ向かって情熱的に開放的に恋を歌うものらしい。「報われない恋は苦しい。けれども嬉しい」というように。そこで苦しみを含めて恋に起こるすべての感情を楽しみとして捉える恍惚感はどこからくるのか?という疑問が湧いた。そのときいつもながら神様が回答を運んでくださるとしか思えないグッド・タイミングで私の目の前に現れたものがあつた。それは科学雑誌に発表された論文を扱った以下のような内容の新聞記事だった。

ニューヨークにあるシラキュース大学の Stephanie Ortigue 博士らの fMRI (機能的磁気共鳴画像法)によると、人間は恋に落ちるとドーパミン、オキシトシン、アドレナリン、ヴァソプレシン等を分泌し、脳の12領域が相前後して働いて、それが多幸感を誘発するという。一目惚れでは血中の神経成長因子の水準が高くなる。母性愛などの無償の愛では脳の中央部の活動が活発になるという。そして情熱的恋愛では脳の報酬系(精神的表現や比喩的、象徴的イメージ)、身体的イメージなどの高次の認知機能が活発化するという。成程、わかる。恋の詩が厭世的になるわけが、恋の曲が情熱的になるわけが。一目惚れ時点ではまだ詩は生まれぬ。中央神経系神経伝達物質がドバっと一気にくると、それを受け止めるので精いっぱい。精神的イメージと身体的認知が生まれ、それが少し成長した時点で比喩や象徴的言葉となって詩が生まれる。幸福の絶頂や苦しみの深淵にはまり込んでいるときには考えがまとまらないように、微妙に落ち着いた時点でようやく客観視点が目覚める。カァ〜と熱を帯びた脳は、次にその感情を処理する自動制御を行なうのかもしれない。そしてその時点で恋人を(ヴィジュアル度に関係なく自分だけの基準で)太陽に例えたり、瞳を輝く星に例えたりして、最大限に恋する相手を褒めまくるのがイタリア人の情熱かもしれない。欧米では恋人や妻を褒めるのは日課となっているようだが、比喩の強度においてはイタリアがダントツであるような気もする。イタリアでは太陽と星がとことん輝き、フランスでは太陽・星・月の明るさが目立つ。ドイツでは月の静かな光りか?日本では月の控え目な佇まいが女性の美に例えられる。それらの感覚は自然環境の及ぼすところが大きい。国によって空の色が違う。同じ国内でも場所によって空や雲や土の色が違う。風の匂いも違う。そこから土着の文化、文学や音楽が生まれる。恋の賛美の表現方式は違っても恋の中の苦しみはほぼ共通するだろう。科学的に人間として。だから「恋」は時代を超えて全世界に通用するテーマなのだ。

そして恋に落ちた詩人たちは、頭に浮かんだ言葉のイメージと身体的イメージを組み合わせて、厭世的な美しい言葉に翻訳する。それに感応した作曲家は言葉のイメージに感覚の世界を加筆する。そうしてそれぞれの文化の中で感じ取られた言葉の表現は、それぞれの文化の中に息づくメロディーに乗って運ばれる。このように見ると恋の歌は見事右脳・左脳の領域を満たしている。即ち全身に及ぶのは必然だったのだ。

さて実際、不思議を不思議でなくする科学は素晴らしい。その解明は苦しみを和らげるために役立つだろう。けれども多くの人はおそらく自分の中の恋を未解明のまま放っておくだろう。詩と音楽に乗せた夢の気分をうっとりとして楽しむために。(2012.9.15)